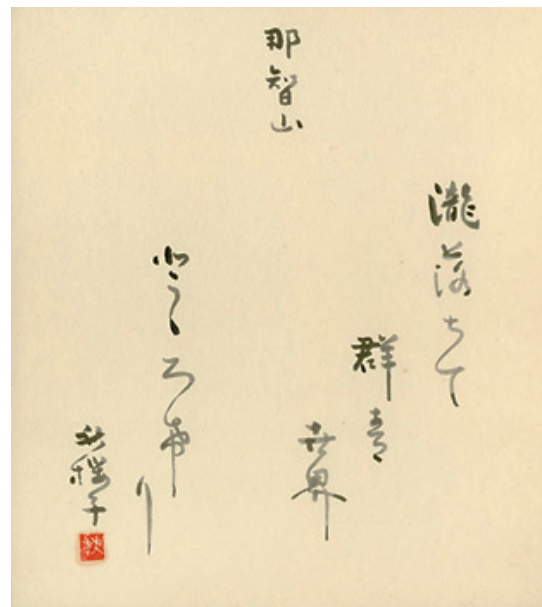


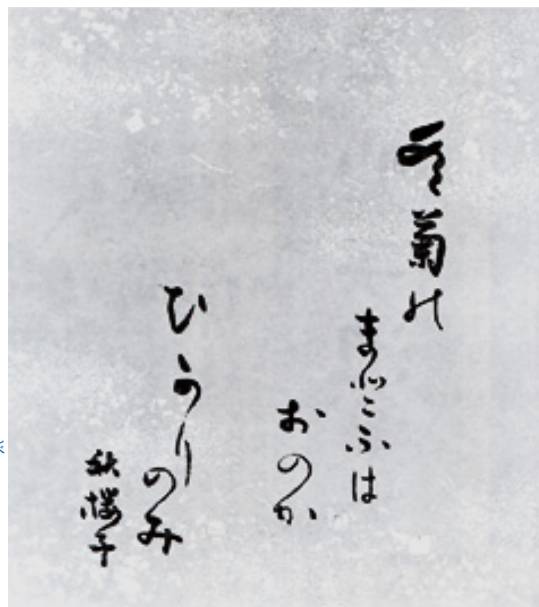
みずはらしゅうおうし
水原秋櫻子 1892年（明治25）～1981年（昭和56） 俳人・医師。東京生まれ。



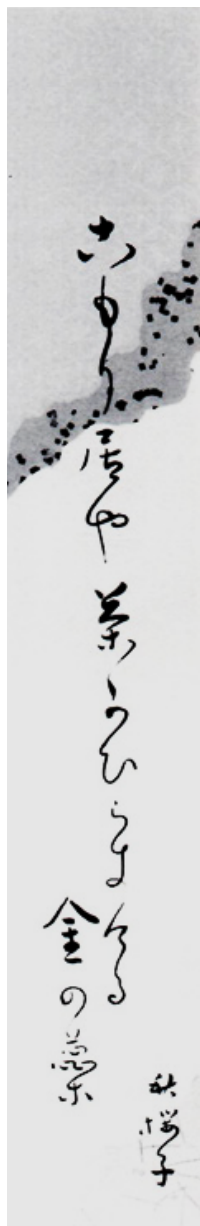
本名は水原豊^{ゆたか}。号は秋櫻子・喜雨亭。『馬酔木』主宰。松根東洋城・高浜虚子に師事。東大俳句会を結成。高野素十・山口誓子・阿波野青畝らと共に「ホトトギス」の黄金時代を築いたが、昭和6年（1931）、虚子の「客観写生」に対し「主観写生」を主張、「自然の真と文芸上の真」を「馬酔木」に書き、「ホトトギス」から独立。ここに、伝統俳句界は虚子派と秋櫻子派の2派に分裂し歩んで行くことになった。彼は無季俳句を否定。秋櫻子の言う主観写生は初期の虚子と同じであり、子規の写生論を否定するものでもあり、芸術にはほど遠い。



秋櫻子筆「色紙・那智山」24×27 cm 那智山
瀧落ちて 群青世界 とどろけり 秋櫻子



秋櫻子筆「色紙」24×27 cm 俳句文学館蔵
冬菊の まとふは おのが ひかりのみ 秋櫻子



秋櫻子筆「短冊」

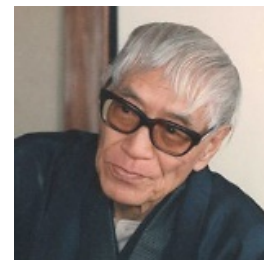
秋櫻子は自然（花鳥風月）だけでなく、人間の感情や生活の事実を詠むことを主張した。『万葉集』

の影響を受け、古語を生かした万葉調の叙情的な調べを創出し、また印象派風と言われる明るい調子の句を吟じ、初期には窪田空穂や斎藤茂吉の連作短歌の影響を受けて、連作俳句を試みた。これらは新興俳句運動として俳壇に広まっていった。彼の連作は「設計図式」と呼ばれ、絵巻物のようにあらかじめ全体の構成が考えられていた。しかし、のちに、連作俳句は一句の独立性を弱めると考え、廃止した。この連作俳句の中から無季俳句が登場してくる。

「元来俳句は作者の主観を尊重すべきもので、短詩ながら人を惹きつけるのは、その主観の力なのである。ただし主観を表面に押し出せば句はたちまち浅薄なものになってしまう。そこで表面にはただ眼に見えたままを描き、主観はこれを句の調べに托してあらわす—これがほんとうの写生というものだ、私は考えていた。」（秋櫻子『私の履歴書』より）

「自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない」「心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真だ」とした。（田島和生『新興俳人の群像—「京大俳句」の光と影』より）

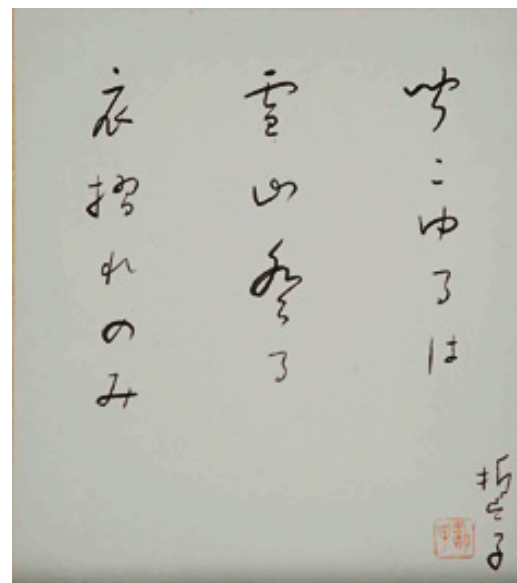
彼の色紙の定石は、全体を、句の五・七と五と落款との二群に分け、上下左右の余白をほぼ同じにして安定させる散らし書き。読みやすいように行書体を中心にし、正座したように真直ぐに書く。上五を高く、中七を二つに分けて書き、間を空けて、下五を中ほどから書き、二行に分け、落款を添える。



山口誓子

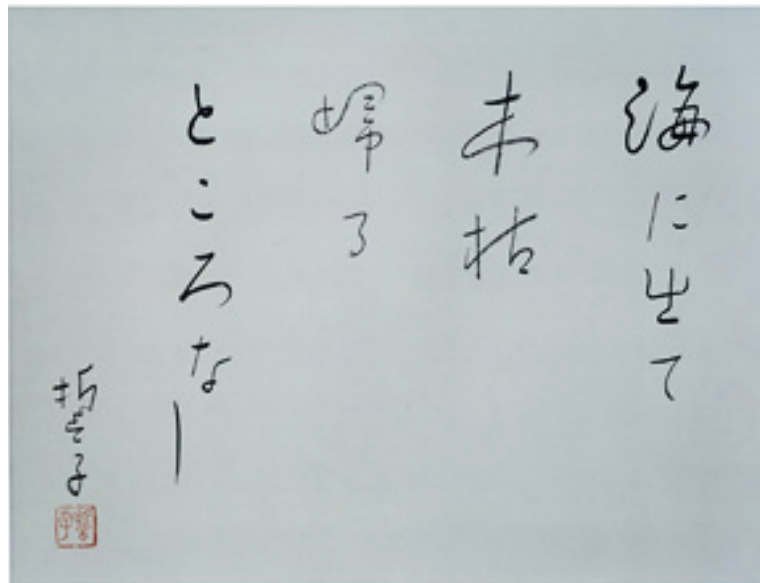
1901年（明治34）～1994年（平成6）俳人・会社員。京都市生まれ。

本名は、新比子。誓子は俳号。「東大俳句会」に参加。高浜虚子に師事。昭和10年（1935年）、水原秋櫻子に従い「ホトトギス」を離れ、「馬酔木」に移った。昭和23年（1948年）「天狼」を創刊、のち主宰。秋櫻子とともに新興俳句運動の指導的存在であったが、無季俳句を批判し、1936年ごろより秋櫻子と共に、この運動から離れ、有季定型を守った。



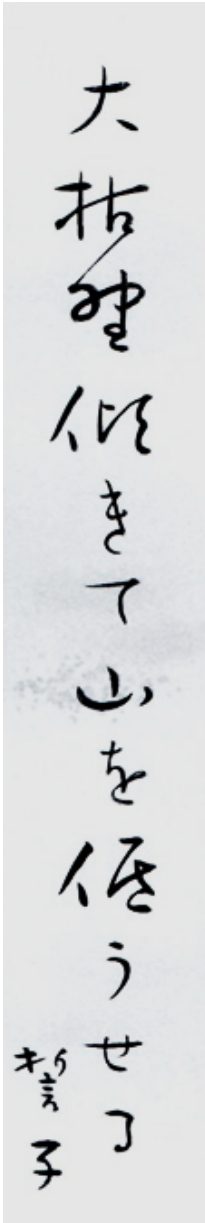
誓子筆「色紙」24×27 cm

聞こゆるは 雪山登る 衣摺れのみ 誓子



誓子筆 海に出て 木枯 帰る ところなし 誓子

誓子の定石、行頭をそろえる構成法は近代詩と同じ感覚である。



誓子筆「短冊」

大枯野 傾きて 山を 低う せる 誓子

誓子は、近代的・都会的な題材で「即物非情」「知的構成」と言われる作風を確立した。彼の連作俳句の「写生構成」論は、寺田寅彦のモンタージュ論の影響を受けたものである。※「写生構成」とは、写生したもの^に知的操作を加えて世界の創造を行うというものらしい。「根源俳句」を提唱。晩年、自身の俳句を芭蕉を継承するものと考えた。彼の代表的な句は、
学問のさびしさに堪へ炭をつぐ（1924年作）
かりかりと螳螂蜂の兒を食む（1932年作）
ピストルがプールの硬き面にひびき（1936年作）
炎天の遠き帆やわがこころの帆（1945年作）
1940年（昭和15）2月から8月にかけて西東三鬼ら15名が各地で検挙されて京都に連行される「京大俳句会」事件が起きた。これは、当局による俳句への最初の弾圧である。その後、1941年2月の一斉検挙など全国各地で俳壇にたいする弾圧がおこなわれた。弾圧は主として反伝統派の総称である「新興俳句」派への弾圧であり、多くの新興俳人・自由律俳人が検挙され起訴された。弾圧の根拠とされたのが「治安維持法」と「国家総動員法」である。「新興俳句弾圧事件」は「京大俳句」事件から昭和18年12月6日の「蠅座」弾圧事件までの4年間に渡った。※『京大俳句』は1933年1月、平畑静塔・井上白文^{（はくぶん）}地らによって創刊された。顧問に水原秋櫻子・山口誓子・鈴鹿野風^{（すしかのふう）}呂・日野草城^{（ひろくさ）}がいた。
「京大俳句会」は京大と三高生らによってつくられ、伝統俳句の陣営に属していたが、1933年から、無季、規準律（定型と自由律の中間の型）を提唱し、リアリズムを標榜、1937年以降、「戦争俳句」の実践をおこなった。花鳥風月を詠むという伝統俳句ではなく、生活や社会をリアルに表現しようとする無季俳句、新興俳句の一派の拠点が「京大俳句」であった。



井泉水筆「自画賛」32.7×38.7 cm 鯉の図

擬自像 ちる花 池一杯にして 大泉園主人
井泉水



井泉水筆「自画賛色紙」 二十日大根の図

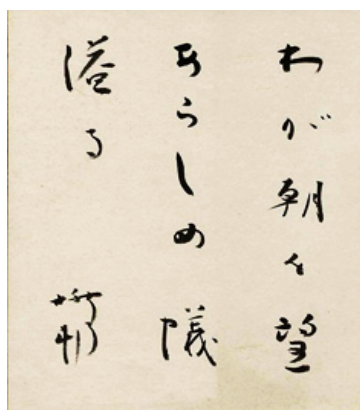
たんばこ売りの昔からの たんば冬晴
井泉水



荻原井泉水
おぎわらせいせんすい

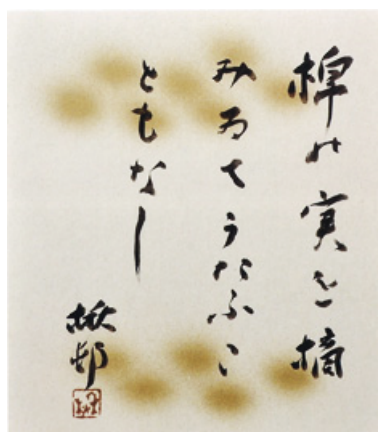
別号は愛桜・随翁。東京生まれ。1911年（明治44）新傾向俳句機関紙「層雲」を主宰。河東碧梧桐も加わる。1915年（大正4）無季自由律俳句を提唱、意見の異なる碧梧桐が層雲を去る。この頃、尾崎放哉・種田山頭火が層雲に加わる。カナモジカイ評議員だった。

1884年（明治17）～1976年（昭和51）俳人 本名は幾太郎のち藤吉



萩原筆「色紙」

わが朝を望 あらしめ蟻
溢る 萩原



萩原筆「色紙」24.1×27.1 cm

棉の実を摘 みあてうたふこ
ともなし 萩原

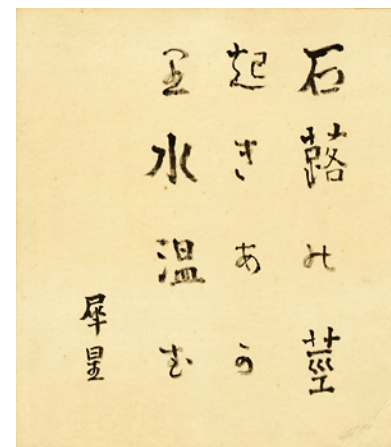
行頭と行末をそろえる散文風の構成。句は26歳の時の作。

萩原は、外面的写生や主観的叙情を否定して「真実感合」を説いた。



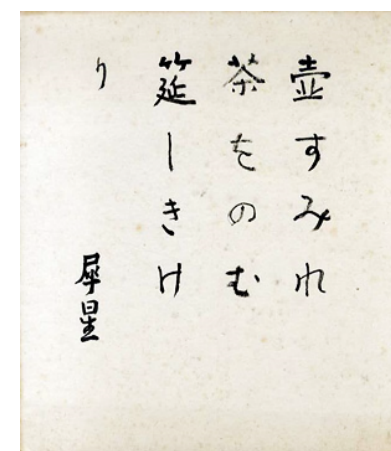
加藤萩原
かとうしゅうそん

1905年（明治38）～1993年（平成5）俳人、国文学者
本名は健雄。東京生まれ。水原秋櫻子に師事し、「馬酔木」の同人となるが、考えが合わなくなり、1942年「馬酔木」を離れる。主観写生から生活や自己の内面を掘り下げる作風へと移行し、石田波郷・中村草田男らと共に「人間探求派」と呼ばれた。
1940年、「寒雷」を創刊・主宰。ここからは、森澄雄や金子兜太ら多様な俳人が育った。



犀星筆「色紙」絹本

石落の茎 起きあかり水温む
犀星



犀星筆「色紙」

壺すみれ 茶をのむ 筵しきけり
犀星

行頭と行末をそろえる散文風の構成。



室生犀星
むろうさいせい

1889年（明治22）～1962年（昭和37）詩人、小説家
本名は、室生照道。別号に「魚眠洞」。石川県金沢市生まれ。俳句は少年時代に旧派俳句入門。その後、新傾向俳句、自由律俳句を作ったが、晩年、定型尊重の伝統俳句へ戻った。
夏の日の匹婦の腹にうまれけり 木枯やいのちもくそと思へども
栗ひらふひとの声ある草かくれ あんずの花かげに君も踰むか（自由律）
うすもり都のすみれ咲きにけり 今宵しかない酒あはれ冴え返る



種田山頭火

1882年（明治15）12月3日〜1940年（昭和15）自由律俳句の俳人

本名は種田正一。号は田螺公、山頭火。荻原井泉水に師事。生涯に8万4千句を作った。

1882年（明治15）、山口県防府市八王子で、大地主・種田家の長男として生まれた。

父の竹治郎26歳、母フサ22歳の時の子である。家族は姉（フサ）

と妹（シズ）、弟（二郎・信一）と祖母の8人であった。

1889年（明治22）7歳、4月、松崎尋常高等小学校に入学。12月、弟信一誕生。

父、相場に手を出す、村の助役に就任、政友会と関わる。

1892年（明治25）10歳、3月、自宅の井戸に母が投身自殺（享年33歳）。

死体を見て強い衝撃を受けた。

1893年（明治26）11歳、3月、弟の二郎（6歳）、有富九郎治の養嗣子に出される。

1894年（明治27）12歳、日清戦争勃発。弟信一死亡（享年5歳）翌年、日清戦争終結

1896年（明治29）14歳、4月、私立周陽学舎に入学。文芸回覧雑誌を発行。この頃から俳句も始める。

1899年（明治32）17歳、7月、周陽学舎を首席で卒業。9月、県下随一の名門校、

県立山口尋常中学の4年級へ編入、ここは立身出世主義、

スパルタ教育で有名。山口市内に下宿する。

1901年（明治34）19歳、3月、中学を卒業。異母妹マサコ出生、父妾の磯部コウを入籍。7月、上京し私

立東京専門学校（早稲田大学の前身）の高等予科に入学、新しい欧米の文学を学んだ。

1902年（明治35）20歳、5月、姉フサ死亡（21歳）、妹シズ（18歳）後妻として嫁ぐ。9月、早稲田大学大

学部文学科に入学。第一期生である。9月、正岡子規没。

1904年（明治37）22歳、2月、神経衰弱のため早稲田大学を退学。

7月、帰郷。新文学の動向に関心を寄せた。

日露戦争勃発。文学だけが救いであった。

日露戦争終結

1905年（明治38）23歳、

1906年（明治39）24歳、父、先祖代々の家屋敷を売り隣村大道村の古酒造場を買収、

種田酒造場を開業。そこへ一家で移住。父とは不仲。

1909年（明治42）27歳、8月、7歳年下の佐藤サキノ（咲野）と見合い結婚。

1910年（明治43）28歳、8月、長男・健生まれる。大逆事件

1911年（明治44）29歳、5月、『青年』に「田螺公」という俳号で定型句を発表。

「山頭火」の号でツルゲーネフの小説などの翻訳を発表。

4月、『層雲』創刊。弥生吟社に参加。

1913年（大正2）31歳、荻原井泉水に師事、井泉水主宰の『層雲』に「山頭火」を俳号にして自由律俳句を

投稿し掲載される。7月、朝鮮に旅行。8月、『郷土』を創刊。

1914年（大正3）32歳、第一次世界大戦勃発。防府俳壇の中心になる。井泉水、季題廃止を宣言。

10月、防府などに井泉水を迎えて句会を開き、井泉水と初対面。

1915年（大正4）33歳、5月、広島で開催された中国連合句会に参加。碧梧桐『海紅』創刊、層雲を離れる。

年末、酒蔵の酒が2年続けて腐敗し酒蔵場が経営危機に陥る。

1916年（大正5）34歳、3月、『層雲』の俳句選者になる。4月、種田家破産、一家離散。父は行方不明。山

頭火は、友人を頼って妻子と熊本市に移住。5月、市内下通町で古書店「雅楽多

書房」を開業したが失敗し、額縁店「雅楽多」として再開業。経営は次第に妻に

任せるようになっていった。酒を飲むようになる。

12月、弟の二郎、養嗣子先から離縁される。12月9日、夏目漱石没。

燕とびかふ空しみぐと家出かな 山頭火



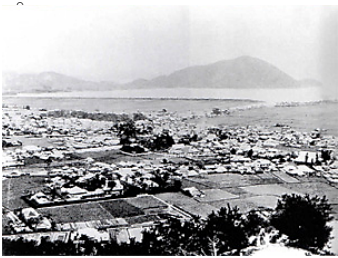
山頭火 22歳頃



咲野（サキノ）



山頭火 19歳頃



山頭火の故郷・三田尻（現、防府市）

1917年（大正6） 35歳、**ロシア革命** 約6600万人の犠牲者。
1918年（大正7） 36歳、6月、**第二郎**、**岩国の愛宕山中で縊死**。**世界大戦終結**、死者数は約3700万人

スペインかぜ流行（1918〜19年） 世界の死者数は、5千万〜1億人、日本の死者約48万人、

1919年（大正8） 37歳、10月、文学で立つため単身上京。セメント試験場などの現場で働く。暮れ、**祖母ツル死亡**（88歳）

1920年（大正9） 38歳、**11月11日、離婚**。一ツ橋図書館に事務員として勤務。

1921年（大正10） 39歳、5月8日、**父死亡**（66歳）

1922年（大正11） 40歳、12月、神経衰弱再発、図書館を辞める。

1923年（大正12） 41歳、**9月1日、関東大震災**で焼け出され、熊本へ帰る。

10月、熊本市郊外川湊の蔵二階に仮寓し、額縁などの行商を営む。

1924年（大正13） 42歳、上京するも、都会での生活をあきらめ、熊本でサキノの営む「雅楽多」に出入り。

12月、泥酔し、路面電車の前に立ちはだかり、電車を止め大騒ぎになったが、九州日目の記者に助けられ、市内の曹洞宗報恩寺住職・

望月義庵に預けられ、寺男となり、禪門に入る。

1925年（大正14） 43歳、2月、望月義庵を導師として**出家得度**。法名は耕畝。

3月、味取観音堂（曹洞宗瑞泉寺）の堂守となる。

1926年（大正15） 44歳、4月、観音堂を去り、旅に出る。**放哉没**。

6月、熊本から宮崎、大分へと行乞。

8月、柳川、徳山の句友を訪ね山陽地方を行乞。旅先から『層雲』に投稿を続けた。

1927年（昭和2） 45歳、1月、広島県内海町で新年を迎える。

1928年（昭和3） 46歳、1月、徳島で新年を迎える。7月、小豆島に渡り放哉墓参。

その後、岡山から山陰地方行乞。

1929年（昭和4） 47歳、1月、広島で新年を迎え、山陽地方行乞。

2月、北九州地方を行乞。息子・健を訪ねる。

3月から8月まで熊本の「雅楽多」に寄宿。

9月、旅立、

11月、阿蘇で井泉水と会う。そのあと大分を経て熊本に帰着。**世界大恐慌**。



高千穂峽（宮崎県）



行脚姿の山頭火
昭和4年11月、阿蘇にて

敗して、旅に出る。宮崎、福岡などを巡り、

12月、熊本市内で間借り「三八九居」と名づけ住む。

1931年（昭和6） 49歳、2月、個人誌「三八九」第1集発行。

3月の第3集で終わり。12月末旅に出る。**満州事変**

1932年（昭和7） 50歳、福岡、佐賀、長崎と巡る。5月、山口地方行乞。

6月、第一句集『鉢の子』刊行。**五・一五事件**。

9月、山口市小郡町矢足に一軒家を借り、

「其中庵」と称して住む。自殺未遂を起こす。

12月、「三八九」第4集発行。**満州国建国宣言**。

1933年（昭和8） 51歳、1月、「三八九」第5集発行、2月、第6集発行。

3月、長男・健、秋田鉱山専門学校を卒業。

5月、望月義庵和尚来庵。11月、井泉水来庵。

12月、第二句集『草木塔』刊行。近郷を行乞。**日本、国際連盟を脱退**。



山頭火、昭和8年



「其中庵」周囲に柿の木が植えてある



曹洞宗瑞泉寺（味取観音堂）

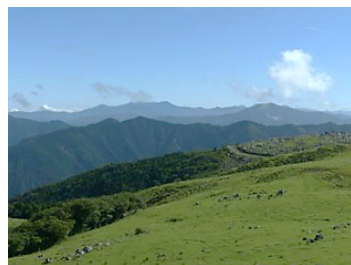


関東大震災（死者約10万5千人）



もりもり盛りあがる雲へあゆむ

1940年（昭和15） 58歳、



愛媛の山々、石鎚山が見える

1939年（昭和14） 57歳、

1938年（昭和13） 56歳、

一九三七年（昭和12） 55歳、



永平寺

1936年（昭和11） 54歳、

1935年（昭和10） 53歳、

1934年（昭和9） 52歳、

2月、福岡地方行乞。3月、東上の旅へ。
 広島、神戸、京都、名古屋に句友を訪ね、
 木曾路から信州飯田を経て帰庵。5月、健来庵。
 1月、其中庵で新年を迎える。
 2月、第三句集『山行水行』を刊行。
 7月、北九州に旅す。8月5日、自殺未遂。
 12月6日、死に場所を求めて東上の旅へ出る。
 1月、岡山で新年。2月、第四句集『雑草風景』刊行
 3月、神戸、大阪、京都、伊賀上野、伊勢へ。
 4月、鎌倉を経て東京に出、「層雲」中央大会に参加。
 5月、甲州路、信濃路から柏原にて一茶の跡を訪ねる
 6月、新潟の良寛遺跡を巡り、
 山形を経て仙台、平泉に至る。
 7月、酒田、福井、永平寺を経て帰庵。
二・二六事件。日独防共協定調印。
 3月、九州地方に行乞。熊本にサキノを訪ねる。5月、第五句集『柿の葉』刊行。
 9月、下関の材木商店に就職するが、すぐ辞める。11月、泥酔の無銭飲食、山口
 警察署に留置される。**7月7日、盧溝橋事件、日中戦争始まる。**
 3月、大分地方を行乞。11月、其中庵を出る。
 11月下旬、湯田温泉に仮寓し「風来居」と名づける。
 12月、長男・健、満鉄に入社し満州に渡る。
 1月、第六句集『孤寒』刊行。3月、東上の旅へ、
 近畿、東海、伊那へ行乞。
 伊那で念願の井月墓参を果たす。
 5月、風来居に帰る。
 9月末、風来居を捨て、松山に立つ。
 10月、四国遍路に旅立つ。
 12月15日、松山市城北、御幸寺境内に結庵、
 「一草庵」と名づける。
国民徴用令公布。第二次世界大戦勃発。
 1月、「柿の会」結成される。
 4月28日、一代句集『草木塔』刊行。それを、
 携え句友たちに呈するため中国、九州地方へ旅行。
 6月3日、最後の旅を終えて、一草庵に戻った。
 句会を開き、付近を散策し、子規の遺跡を訪ねる。
 7月25日、第七句集『鴉』刊行。
 10月10日、脳溢血で倒れ一草庵に寝ていた、
 隣室では「柿の会」の句会が開催されていた。
 翌朝未明、心臓麻痺で死亡していた。満57歳
日独伊三国同盟締結。大政翼賛会発足。
翌年、太平洋戦争開戦。

参考書、『放浪の俳人山頭火』村上護著



母フサと山頭火の墓
 （防府市護国寺境内）

息子の健は満州から急遽帰
 国しフサと並べて葬った。健
 は咲野と一緒に熊本に葬ら
 れている。



終の棲家となった一草庵（松山）



信州・伊那の
 井上井月の墓



山口市の湯田温泉
 にある風来居



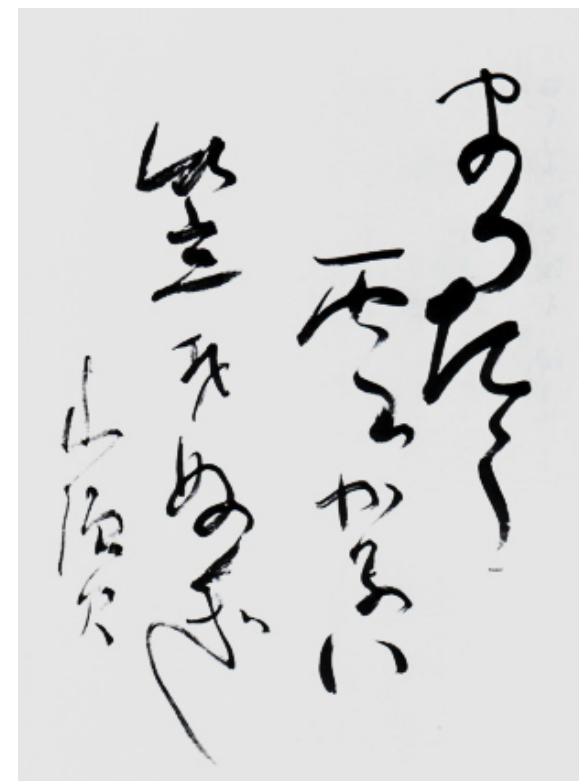
井泉水と山頭火
 昭和11年4月



山頭火、昭和11年
 新潟長岡市にて撮影



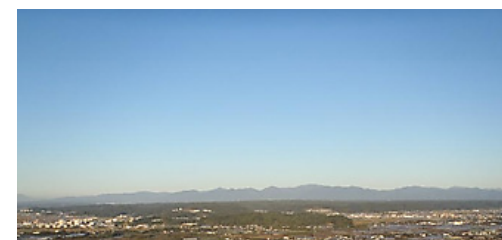
山頭火、昭和8年頃か？



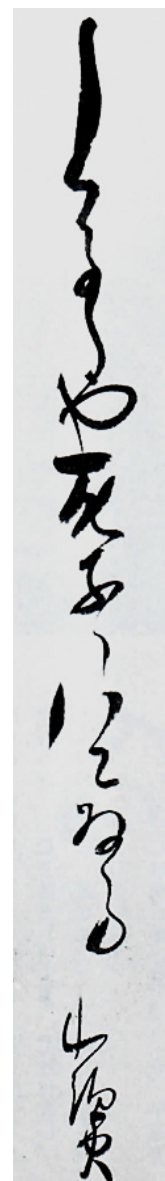
山頭火 47 歳、昭和 5 年（1930）揮毫、句も同年 10 月 26 日作。

まったく 雲がない 笠をぬぎ 山頭火

これは初期の書。軽快に動きまわっている。
宮崎平野を行乞して歩いている時の作。行乞記には
「ほんとうに秋空一碧だ、万物のうつくしさはどうだ、
秋、秋、秋のよさが身心に徹する」と書かれている。

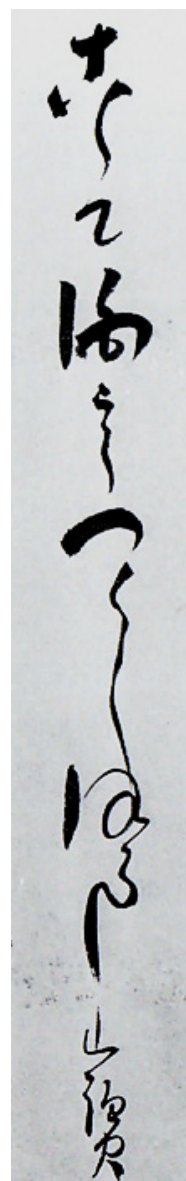


宮崎平野



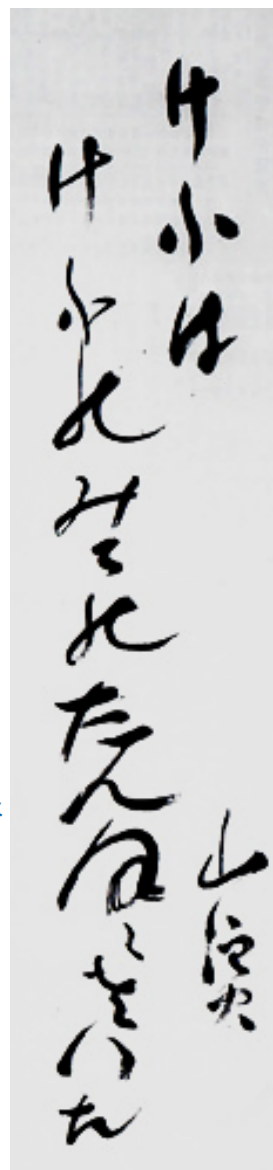
しづるゝや死なゝいでゐる 山頭火

昭和 5 年揮毫
句も同年作。



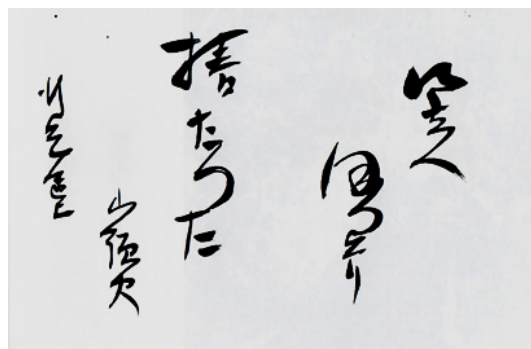
くさくさ けふの けふの みちの たんぼ さいた 山頭火

昭和 5 年揮毫
句も同年作。

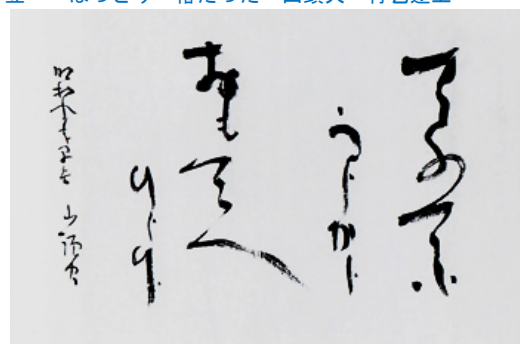


けふは けふの みちの たんぼ さいた 山頭火

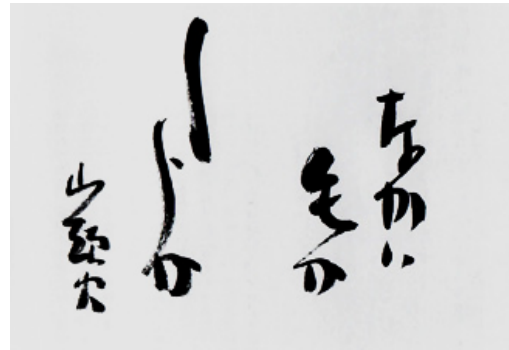
昭和 5、6 年頃揮毫？
句も同年作。



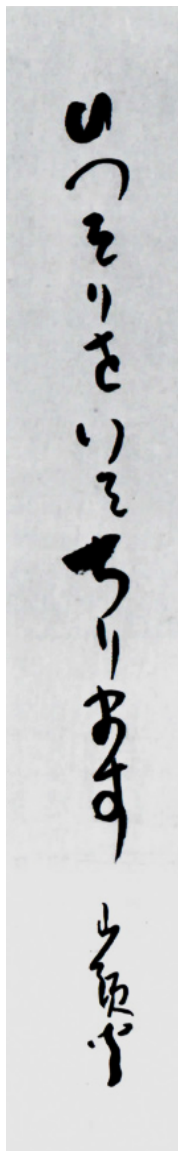
昭和 7 年揮毫、句も同年作 長崎県松浦市での行乞中の作
笠へ ぼったり 椿だった 山頭火 行乞途上



昭和 9 年 2 月揮毫、句は前年 6 月 16 日、其中庵での作。
てふてふうらからおもてへひらひら 昭和九年早春 山頭火



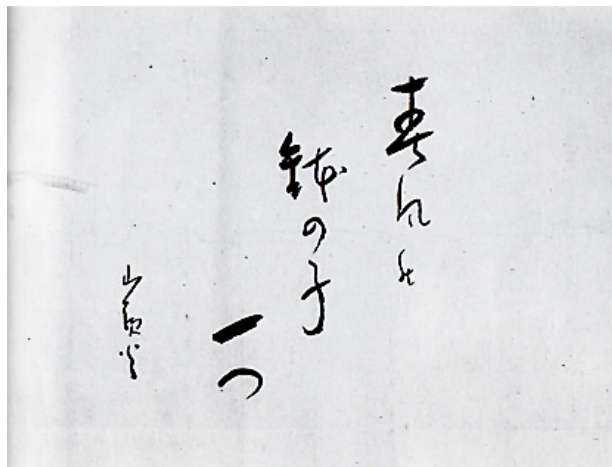
昭和 9 年 2 月揮毫 いいおせいじょうし
飯尾青城子の画帖に書いたもの。
ながい 毛が しらが 山頭火



昭和11年5月、
信州で揮毫
句は昭和10年
4月13日の作。



昭和11年揮毫
句は昭和7年
3月21日、長崎
県早岐での作。



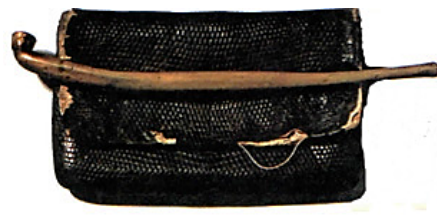
昭和11年5月、旅中での揮毫 句は昭和8年3月19日作

春風の 鉢の子 一つ 山頭火

鉢の子とは鉄鉢のこと。「てっぱち」ともいう。



山頭火の鉄鉢

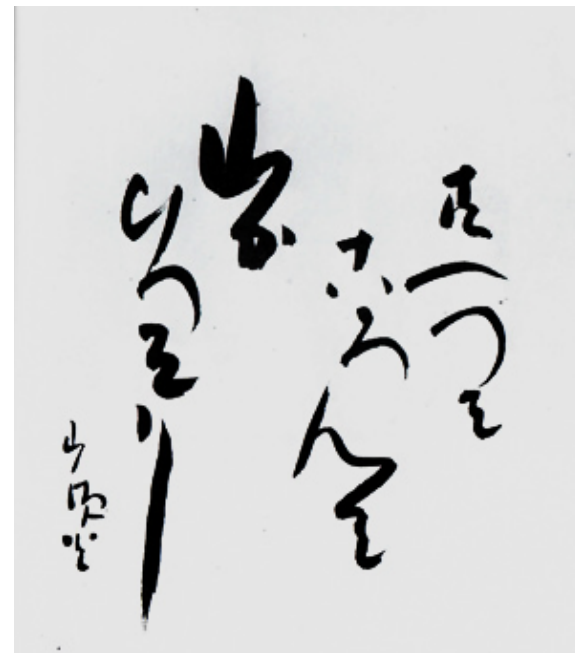


山頭火愛用のキセルと煙草入れ



昭和11年揮毫

お正月のからすかあ〜 山頭火



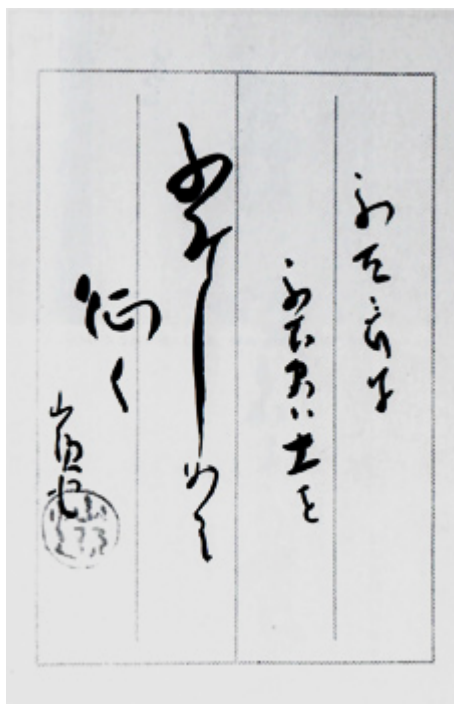
昭和9年(1934・52歳)揮毫、句は昭和4年11月15日、
耶馬溪での作。

二句一章の句、視覚と聴覚の取り合わせ、書も二
句一章にしたがって書き分けられている。

すべって ころんで 山がひっそり 山頭火



やばけい
耶馬溪 (大分県)



昭和14年（1939年）10月、松山で揮毫
句は昭和14年1月頃の作か。

ふたゝびは ふむまい土を ふみしめて
征く 山頭火 山頭火印

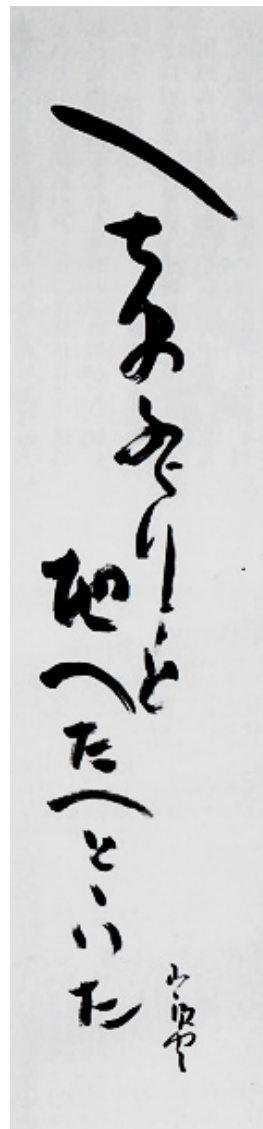
折本第6句集『孤寒』の扉の言葉に
天われを殺さずして詩を作らしむ
われ生きて詩を作らむ
われみづからのまことなる詩を
とあり、これに続く「銃後」の章に収め
られた句の一つである。

「私は陸軍の誠意を信じる、熱情を尊ぶ、
たゞ憂ふところは専政、独裁、圧迫、
等々である、政党よ、しっかりしろ、国
民よ頑張れ！」（山頭火の昭和12年1月
30日の日記より）



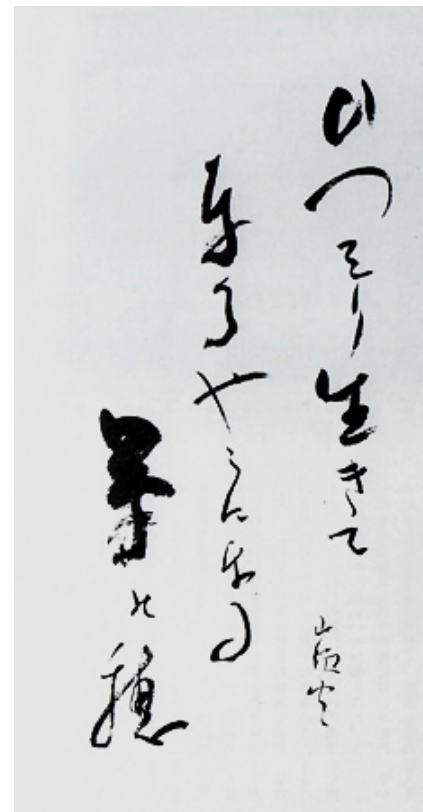
昭和14年10月
松山で揮毫

うれしいことも かなしいことも 草しげる 山頭火



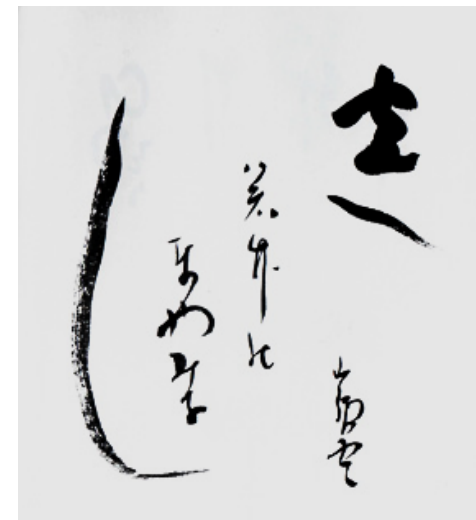
昭和14年10月1日
松山で揮毫。
句は昭和8年8月7日作。

へちまぶらりと 地へたへといた 山頭火

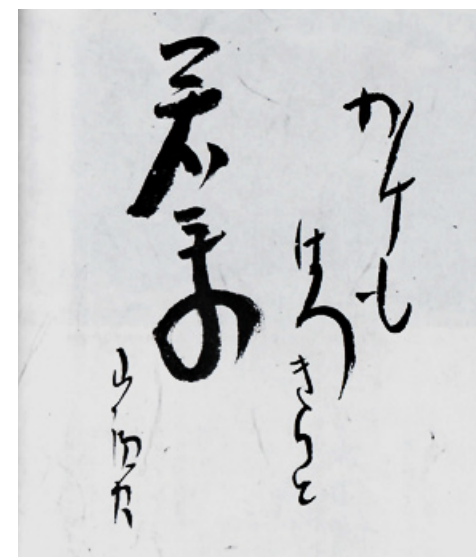


昭和13年（1938年）揮毫 56歳
ひっそり生きて なるやうになる
草の穂 山頭火

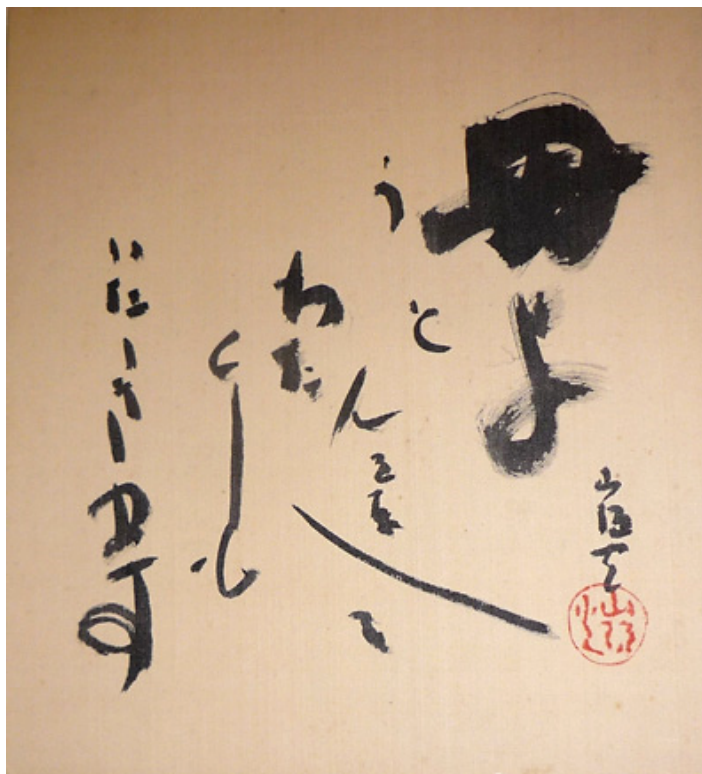
「日本が—世界も—さうであるやう
に、私自身も転換期に立ってゐる、生
死に直面してゐる、最後のあがきだ、
私は迷うてゐる、どうすればよいの
か、どうしなければならぬの
か。……」（山頭火の昭和13
年4月28日の日記より）



昭和13、4年頃揮毫
空へ 若竹の なやみな し 山頭火

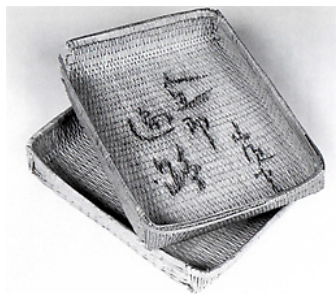


昭和13年初夏揮毫
かげも はっきりと 若葉 山頭火



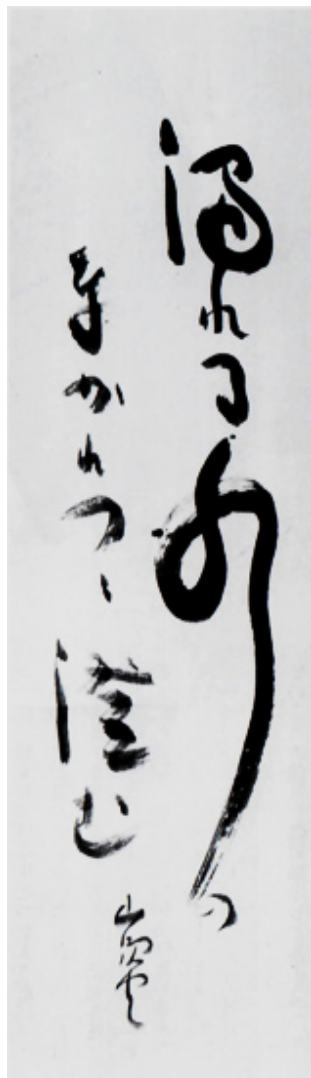
母よ うどんそなへて わたくしも いただきます 山頭火

最晩年、一草庵時代の揮毫 句は昭和13年3月6日、其中庵での作

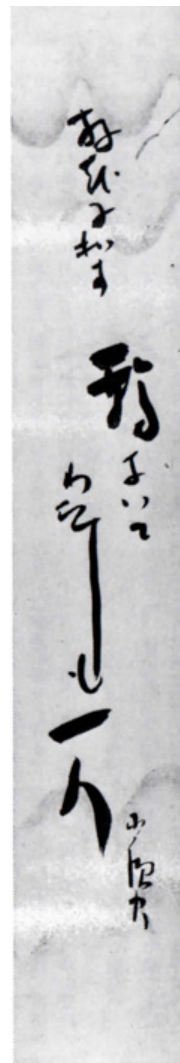


母の遺骨を入れていた
旅行用行李
蓋裏に「人生即遍路
山頭火」と揮毫。

「亡母四十七回忌、かなしい、さびしい供養、彼女は定めて（月並みの文句でいへば）草葉の蔭で、私のために泣いてゐるだらう！今日は仏前に供へたうどんを頂戴したけれど、絶食四日でさすがの私も少々ひよろ／＼する、独坐にたへかね横臥して読書思索。万葉集を味ひ、井月句集を読む、おゝ井月よ。」（山頭火の「日記」より）
山頭火は、涙なしには母は語れなかったという。
たんぼぼちるやしきりにおもふ
母の死のこと（1940年3月母の第49回忌での作）

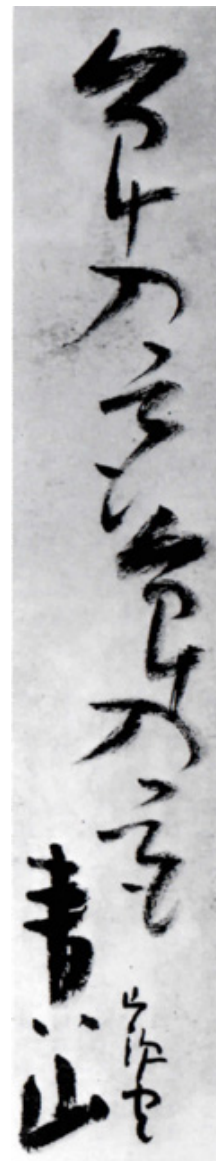


最晩年の揮毫、句も昭和15年の作。
気迫のこもった書、書によって句意や人となりが解る。

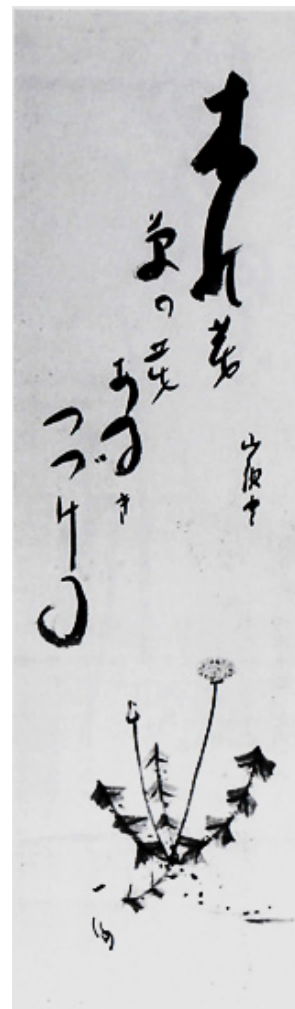


放哉に和す 鴉ないて わたしも一人 山頭火
濁れる水の ながれつゝ澄む 山頭火

最晩年、一草庵時代の揮毫
放哉とは生前会うことはなかった、この句は放哉の死後に作られた。

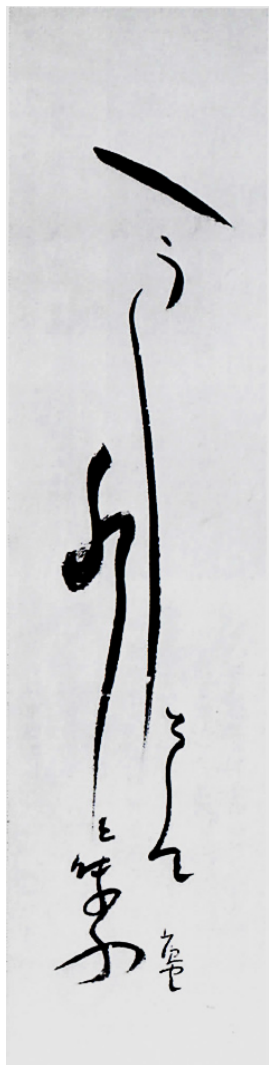


昭和15年、一草庵時代、最晩年の揮毫 句は大正15年6月頃？宮崎県高千穂あたりで詠む。



昭和15年、松山・一草庵時代の揮毫。絵は高橋一洵
「前歩を忘れ後歩を思はない一歩々々だ。一歩々々には古今なく東西なく、一歩即一切だ、こゝまで来て徒歩禪の意義が解る。」（『行乞記』昭和5年11月9日）

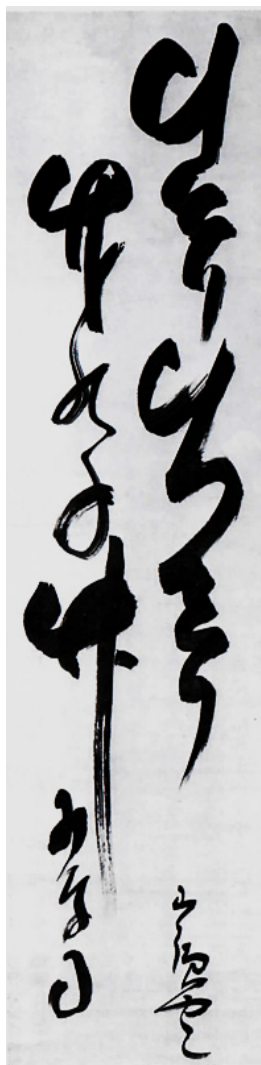
木の芽 草の芽 あるき つづける 山頭火



へうくとして 水を味ふ 山頭火

死の数日前の揮毫、句は昭和3年作。

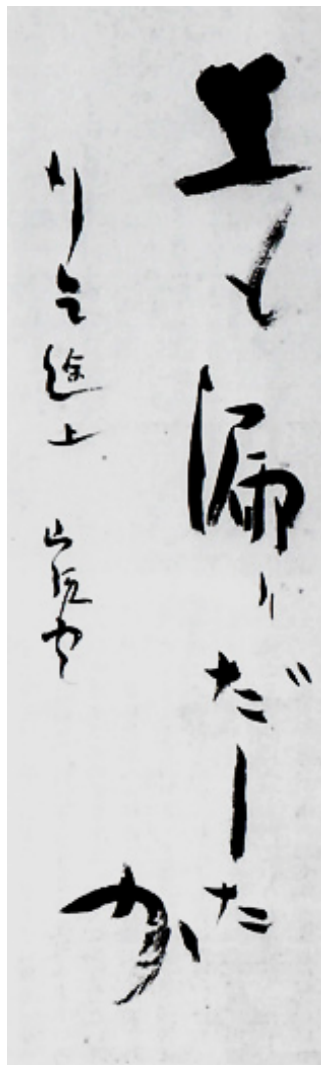
澄んでいる。「へう」は「飄」のこと。



ひとりひっそり 竹の子竹になる 山頭火

最晩年の揮毫、句は昭和9年7月1日作

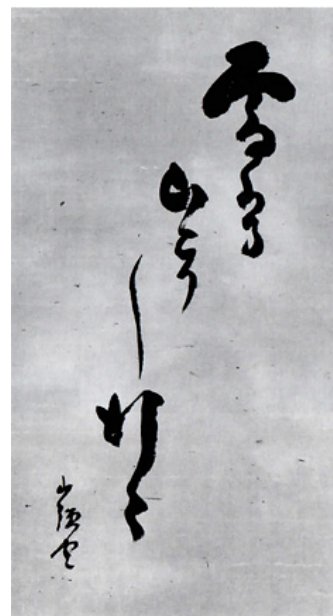
この句は、横長の紙に書いたものもある。



笠も漏りだしたか 行乞途上 山頭火

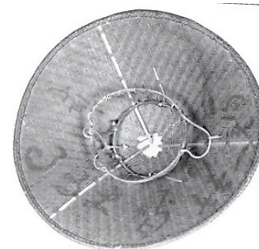
最晩年の揮毫、句は昭和5年11月30日、福岡県での作。

9字からなる短律句。

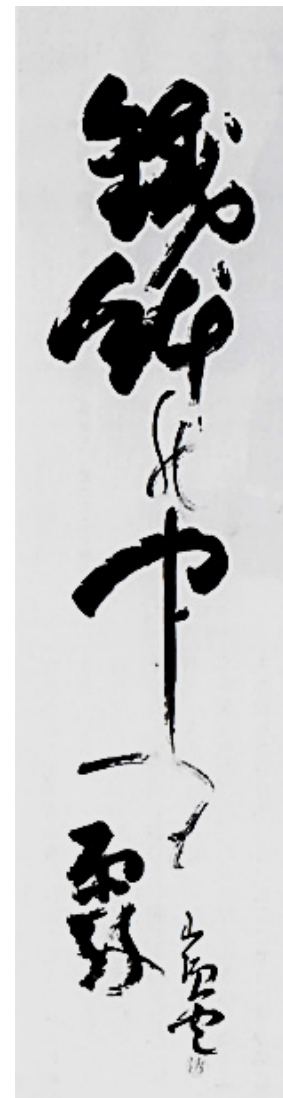


雪ふるひとり 行く 山頭火

最晩年の揮毫、句は昭和8年1月頃の作。「雪ふるひとり」と「ひとり行く」で切る、二句一章仕立てらしい。「雪の風情は雪を通して観る自分の風姿である」(山頭火日記より)



山頭火愛用の網代笠
「水音のうらからまいる 山頭火」と書かれてある。



鉄鉢の中へも 霞 山頭火

最晩年、松山で揮毫、最高傑作の書と言われる。句は昭和7年1月8日、北九州の三里松原での作。



井上井月肖像 下島勲筆
明治20年(1887)65歳で没、越後長岡出身の俳人。信州伊那谷を中心に放浪、風だらけで酒好き、芭蕉に私淑、能書。山頭火は井月を思慕し、句をくり返し読んだ。

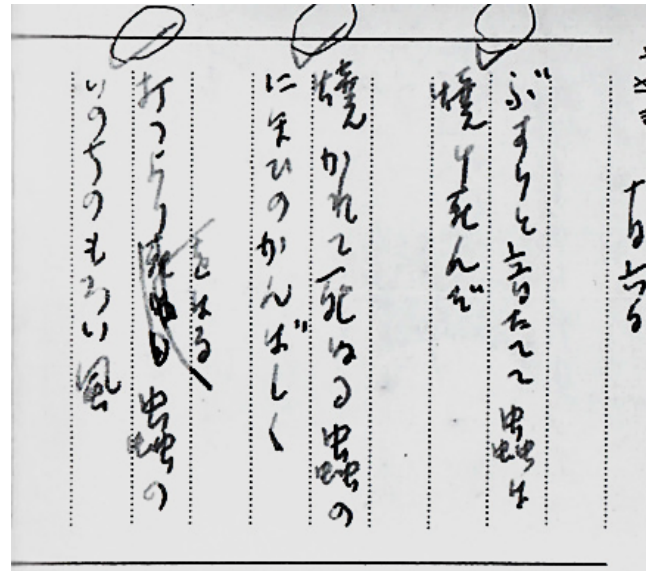
「樹明兄が借して下さった『井月全集』を読む、よい本だった、今までに読んでみなければならない本だった、井月の墓は好きだ、書はほんとうにうまい」(山頭火日記の昭和5年8月2日の項より)
「私は芭蕉や一茶のことはあまり考えない、いつも考えているのは路通や井月のことである。彼等の酒好きや最後のことである」(山頭火日記より)



最晩年の揮毫、句は昭和8年頃の作か？ 絵は唯一の俳句弟子の近木黎々火筆 黎々火は山頭火より30歳年少

其中 雪ふる 一人として 火を焚く 山頭火

「其中一人」は『観音経』にある経文の一節から抜き出したもの。この句は「独生独死 独去独来」(『大無量寿経』)「天上天下唯我独尊」(釈迦)の意のようだ。



山頭火筆「絶筆三句」昭和15年10月6日句帖に記述されたもの。万年筆で書かれている。亡くなるのは10月11日未明、望み通りの、ころり往生であった。

十月六日
ぶすりと音たてて虫は
焼けて死んだ
にほひのかんばしく
打つよりはる虫の
いのちのもろい風
『層雲』に発表した最後の俳句は、
「もりもり盛りあがる
雲へあゆむ」
である。

一代句集『草木塔』(1940年4月28日、八雲書林より刊行。山頭火の第一句集から第七句集までを集成した句集。山頭火俳句の総決算。山頭火自選の約700句を収める)

冒頭に「若こうして死をいそぎたまへる母上の霊前に本書をお供えまつる」とある。

まつすべな道でさみしい

捨てきれない荷物のおもさまへうしろ

生死の中の雪ふりしきる

また見ることもない山が遠ざかる

百舌鳥啼いて身の捨てどころなし

どうしようもないわたしは歩いてある

うしろすがたのしぐれてゆくか

やつぱり一人がよろしい雑草

いつも一人で赤とんぼ

曼珠沙華咲いてここがわたしの寝るところ

ふるさとの水のみ水をあび

この道しかない春の雪ふる

このみちをたどるほかない草のふかくも

燃えに燃ゆる火なりうつしく

所詮は自分を知ることである。私は私の愚を守らう。



山頭火の7つの折本句集



其中庵の山頭火の小さな机

「無駄に無駄を重ねたやうな一生だった、それに酒をたえず注いで、そこから句が生まれたやうな一生だった」(山頭火晩年の日記より)

放浪日記は昭和5年以後が現存している。それ以前の日記はみずから焼き捨てた。日記は生前には見ない見せない、約束して木村緑平にあずけられた。山頭火は誰にも本心を明かさな人であつたようだ。

種田家の衰退は、父・竹治郎が米相場に手を出し失敗したこと、彼の遊蕩が主な原因らしい、彼は、政友会に関わり、政治に手を出すようにもなる、また、酒宴を好み、女ぐせが悪かつた。常に妾が2、3人いたという。フサは、政治運動に狂奔し家庭を顧みない夫に絶望、夫が妾を連れて別府へ遊びに行った日に、井戸に身を投げ自殺した。

母の死が、山頭火の人生を決定した。彼は生涯、母を忘れることがなかった。

「ぼくが坊主になつたのは、あのままでは母は成仏できないと思つたからだ」と、後年、山頭火は述べている。

「うたふものよろこびは力いっぱい自分の真実をうたふことである。この意味に於て、私は恥ぢることなしにそのよろこびをよろこびたいと思ふ。」

「うたふものの第一義はうたふことそのことではなければならない。私は詩として私自身を表現しなければならぬ。」(『草木塔』より)

1885年（明治18）1月20日～1926年（大正15）4月7日（享年41歳）

号は放哉 自由律俳句の俳人 荻原井泉水に師事。生涯に3700余句作った。

書記官・尾崎信三と母・なかの次男として生まれる。長男は夭折。

1895年（明治28）10歳、鳥取高等小学校入学。日清戦争終結



大学時代の放哉

日露戦争終結

経理部長大原万寿雄の下、契約課に所属。酒ですきんだ生活、母が上京、

1911年（明治44）26歳、坂根馨（19歳）と結婚。

質屋通いと鳥取への送金の頼みを

和服に兵児帯で出勤。

A black and white photograph of a Japanese woman and a young boy. The woman is seated on the left, wearing a dark kimono with a patterned obi. The boy stands to her right, wearing a dark kimono and a light-colored hakama. They are both looking towards the camera.

1914年（大正3）29歳、

を生じ、憂さを晴らすべくよく遊び、酒に溺れるようになる。一年足らずで、東京

1915年（大正4）30歳、東京本社の契約課長になる。『層雲』へ投句。自由律俳句に転向する

1917年（大正6）32歳、7月、保険同好会の集まりで、東洋生命を代表して、大原万寿雄と共に講演を聴く。

1919年（大正8）34歳、4月号をもって、『層雲』への発表をやめる。年末、東洋生命忘年会の幹事をしてい

るとき、日本橋の橋上で通行人に「お歳暮」と称して一〇円紙幣をばらまいた。

1920年（大正9）35歳、6月頃、一週間程無断欠勤している部下の早川泰に、至急出社せよという内容の巻

紙を送りつける。寒くなった頃、その同じ早川に、会社を辞めて堂守になって

一生を送るとの心中を語る。

1921年（大正10）36歳、4月、放哉の肩書は、契約課課長兼財務部調査役。10月、酒と人間関係のため退

一カ月程鳥取に帰る。帰省中、連日鳥取温泉の料亭で

泥酔したり、昼に小便をしたり奇行が目立つ。

1922年（大正11）37歳、春、層雲社の改造問題について相談会を開いた時、

酔って出席。暴れて車の幌を破壊するなどし、

顔面に大怪我をした。4月頃、ソウルに創設予定の、

朝鮮火災海上保険株式会社支配人への話をもたらされる。

禁酒を絶対条件とされる。この事業に失敗すれば「死すか又は僧となるべし」の覚

悟で、5月1日頃、朝鮮に渡る。5月16日、母なかが病没したが、仕事を理由に妻

だけを帰国させた。この頃、朝鮮警部局長の

乗り込み家中捜し回るといふ事件を起こす。

支配人として基礎工事より仕上げ、仕事はこれからという処で、免職を命ぜられる

禁酒が守れなかったことが理由だといわれている。





小豆島

友人を通して、農園の番人とか寺に入る当てはないか、打診する。

7月末、満州に行くが、長春で発病、寄寓先の小原方に臥床。八月末より二カ月ばかり満鉄病院に入院する。寝たままで馨に図書館から借りた本を持って読ませた。借金も返せず事業もできず、馨に死を相談したりする。『極楽より帰って』・『親鸞研究並に真宗研究』を読み、これまで禪宗を信じていたが、浄土の他力宗に転ずる。10月頃、馨とともに大連から帰国、長崎に住む親族に身を寄せる。 **関東大震災**

1924年（大正13）39歳、3月〜6月まで、京都・知恩院塔頭常称院寺男になるも、酒のため寺を追われる。

6月〜翌年3月まで、神戸・須磨寺大師堂堂守なるも、寺の内紛のため去る。

一ヶ月ほど一燈園にもどる。このころから独特の句風に目覚める。

1925年（大正14）40歳、5月〜7月、小浜・常高寺寺男になるも、

寺破産のため去る。7月〜8月、京都・

龍岸寺寺男になるも、重労働のため体が

続かず、井泉水の家へ転がりこむ。



40歳頃の放哉

8月〜翌年4月、井泉水の紹介で、小豆島・西光寺・奥の院・南郷庵庵主になる。

井泉水や句友に夥しい生活用品と金銭の無心をしている。

2月、肺結核と診断される。4月7日、南郷庵で死亡。

看取ったのは老婆一人だけ、2日後、井泉水が葬った。

6月、唯一の句集『大空』（荻原井泉水編、春秋社）

が刊行された。

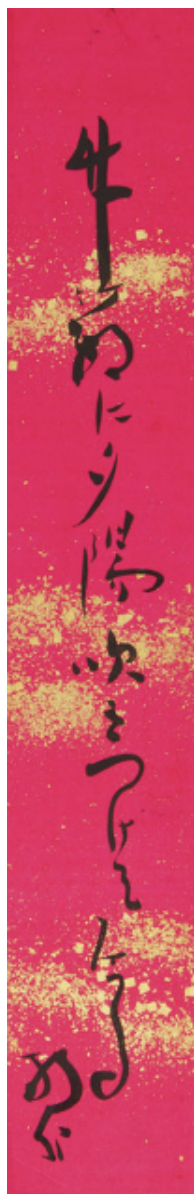
妻の馨は弟のチブスが伝染し死亡（享年38歳）

1930年（昭和5）



南郷庵（小豆島尾崎放哉記念館）

竹藪に夕陽吹きつけて居る 放哉



放哉筆「短冊」
赤地金散らしの短冊に最晩年の揮毫

お寺の秋は大松のふたまた 放哉



放哉筆「短冊」

放哉俳句抄

なんにもない机の抽斗をあけて見る

山に登れば淋しい村がみんな見える

花がいろいろ咲いてみな売られる

爪切ったゆびが十本ある

肉がやせて来る太い骨である

すばらしい乳房だ蚊が居る

髪的美しさもてあまして居る

恋心四十にして穂芒

渚白い足出し

さはある髪をすき居る月夜

たった一人になりきって夕空

一日物云わず蝶の影さす

こんなよい月を一人で見て寝る

わが顔ぶらさげてあやまりにゆく

漬物桶に塩ふれと母は生んだか

足うら洗えば白くなる

入れものがない両手で受ける

せきをして一人

月夜の葦が折れとる

墓のうらに廻る

春の山のうしろから煙が出だした

（大正13頃の作か？）

『層雲』 大正13年8月号発表

『層雲』 大正14年新年号発表

『層雲』 大正14年2月号発表

『層雲』 大正14年3月号発表

『層雲』 大正14年11月号発表

『層雲』 大正15年2月号発表

『層雲』 大正15年4月号発表

『層雲』 大正15年4月号発表

『層雲』 大正15年6月号発表